

ランチタイムミーティング参加記

登壇者： 滝口正哉先生

2024年12月12日に開催されたイブニング・ミーティングでは、本学学校・社会教育講座で特任准教授を務められている滝口正哉先生の研究を紹介していただいた。

滝口先生は、日本近世史、特に江戸に注目した「江戸東京学」を専門とされており、現在は千社札について研究されている。現在多くの大学で授業を持たれている先生だが、立教に着任される前には千代田区の四番町歴史博物館や日比谷図書館で学芸員としての勤務経験もお持ちである。主著に『江戸の祭礼と寺社文化』（2018年）、『江戸の社会と御免富： 富くじ・寺社・庶民』（2009年）などがある。

発表では、まず、ご専門である「江戸東京学」について解説していただいた。日本近世史における史料収集には関東大震災と第2次世界大戦という2つの危機があり、この2つの時点において多くの史料が失われてしまったという。そのような中で、江戸東京博物館の建設を契機として、日本近世史の中でも現在の東京都周辺地域を対象とする「江戸東京学」が発足したそうだ。

次に、滝口先生が現在研究されている千社札とどのようにして出会ったのか、その経緯をご紹介いただいた。先述の通り、先生は大学教員以外にも学芸員としての実務経験をお持ちである。四番町歴史博物館において千社札に関する展示を行ったことがきっかけで、現在の研究を始められたそうだ。学芸員として資料を収集する中で地元の人から話を聞いたり、地域の催しに参加したりすることで対象への理解が深まっていったという。学芸員を経験された滝口先生ならではの研究方法ではないかと思う。

研究発表と併せて、先生が収集した千社札の実物を見せていただいた。千社札は基本的に寺社の建物に張り付けたり、名刺代わりに交換されたりしていて、交換した札を現在でいうところのスクラップブックのようにして保管していた人もいたようだ。実物を見ると、一口に千社札と言ってもそのデザインや大きさ、色彩は実に多様であり、一般的に想起される千社札のイメージよりも種類が豊富であった。気になる人はぜひ実物を見に行ってみてほしい。

質疑応答の時間では、発表に対する質問だけでなく、他の参加者とともに千社札の実物を見ながらこれはなんだろう、この札の持ち主はどんな職業だろうと意見交換を行い、非常に有意義な時間であった。学芸員課程を履修した学生の1人として、また、物をテーマに研究を行っている私にとって、実物を見ることの重要性を改めて実感した。

大教室での講義が多い文学部の学生にとって、このように少人数で発表を聞いたり、先生に直接質問したりできる機会は大変貴重である。研究テーマに悩んでいる人やアカデミアでのキャリアを考えている人は

もちろん、全然知らないけれどちょっと面白そうという理由でも十分である。気になるテーマがあったときには、ぜひミーティングに参加してほしい。

最後に、このような機会を設けてくださった人文研究センターの先生方、そして発表していただいた滝口先生に感謝申し上げます。

中里桃子(文学研究科超域文化学専攻 博士前期課程2年)